2023年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で，学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において，各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は，以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり，今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり，将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度，学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文，調査報告，実践報告のうち，特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし，隔年で対象を変えて表彰します。今年度は，学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は，理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補，②論文賞は，学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文，③学会活動貢献賞は，客観的なデータに基づき，表彰委員会の推薦を受けた候補が，会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て，理事会で最終的に決定しました。

2023年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を，次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様，おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2023年度 日本語教育学会 学会賞

受 賞 者　　浜田 麻里（はまだ まり） 氏

【授賞理由】

浜田麻里氏は，国際交流基金日本語国際センター日本語教育専門員や，大阪大学留学生センター助教授を経て，現在では，京都教育大学において学校教員を養成するお立場から，研究・教育に携わっていらっしゃいます。最近では，増加する外国人児童生徒の環境や背景，言語発達等に関する理解を持ち，個々の外国人児童生徒へ寄り添ったまなざしを持って指導ができる教員の養成や研修に関する研究・実践にも力をいれておられるほか，地域における外国人の子ども達の学習支援・居場所づくりの活動にも尽力されるなど，年少者日本語教育を軸に研究・実践を深められています。

浜田氏の近年の著書や研究としては「日本における外国人児童生徒等への教育と支援―日本語指導担当教員の方略に焦点を当てて」（大山万容・清田淳子・西山教行編著『多言語化する学校と複言語教育―移民の子どものための教育支援を考える』(2022 年, 明石書店)),「外国人の子どもの学習を支える学校･地域の現場」(齋藤ひろみ編著『外国人の子どもへの学習支援』(2022 年，金子書房)),「日本語指導が必要な児童の授業参加を支援する（改訂)」(『小学校国語学習指導書総説編』2023 年),「教師に求められることば意識―多様化する学習者のことばの教育を担うために」(『京都教育大学国文学会誌』，2022 年)，研究代表者として「教師教育者の成長過程―外国籍児童生徒と教育を担う委員を養成する教育者を中心に」(2020-2022 年度，科学研究費基盤研究 (B)）等があります。また，日本語教育学会が文部科学省より受託した「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」(2017-2019 年度）ではモデルプログラムの開発部会の取りまとめに携わられ，それらの成果をもって文部科学省外国人児童生徒の教育の充実に関する有識者会議副座長や文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザーを担ってこられました。

さらに浜田氏は，子どもの日本語教育研究会，異文化間教育学会，社会言語科学会等での理事や委員を歴任されています。また，文化審議会国語分科会日本語教育小委員会，日本語教師の資格に関する調査研究協力者会議委員，日本語教育の質の維持向上の仕組みに関する有識者会議委員等の任も務められ，日本語教育の社会的認知の向上においても寄与されてきました。

浜田氏のこれまでの研究・実践において特筆すべきこととして，氏が日本語教育学の専門性を下地に，学校教育の現場や地域で外国人児童生徒の指導・支援にかかわる人材の養成・研修に努められており，そのような理論に裏打ちされた実践が説得力を持って，現場で直接指導や支援をする学校教員等に多大なる貢献をもたらしていることが挙げられます。

これまでの研究，実践，社会的活動での活躍を称え，今後のさらなる活躍に期待し，浜田氏に日本語教育学会学会賞を贈ります。

以上

2023年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者　櫻井千穂（さくらい ちほ）氏

【授賞理由】

櫻井千穂氏は2013年に大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程を修了されました。日本学術振興会特別研究員（RPD），同志社大学，広島大学での勤務を経て，現在は大阪大学で研究活動や教育実践，社会貢献に精力的に取り組まれています。文化的・言語的に多様な子ども（CLD児）の教育という分野において，第一人者としてその分野の研究および教育実践を牽引されています。

櫻井氏は，二つの文化・言語環境の中で育つ外国につながる児童・生徒の言語能力の発達を主な研究テーマとされています。中でも読書力の発達や会話力と読書力の関係，二つの言語能力の関係についての研究に積極的に取り組まれ優れた研究成果を上げられており，それらの一部は単著『外国にルーツをもつ子どものバイリンガル読書力』（大阪大学出版会，2018年）にまとめられています。また，共著「「DLA〈読む〉」の構成概念妥当性の検証―日本語母語児童を対象としたテキストレベルの妥当性に関する分析―」（『日本語教育』185号，2023年），単著「外国につながる児童生徒への教育―課題とその解決に向けた提言」（『ことばと文字』16号，2023年），真嶋潤子編著『母語をなくさない日本語教育は可能か―定住二世児の二言語能力』（大阪大学出版会，2019年）など，多くの示唆に富む論文を発表されています。

さらに，『外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント DLA』の開発をはじめ，CLD児教育のための汎用的言語能力の参照枠の構築など，言語能力の評価方法の開発や改善，教育現場への普及に貢献されています。また，文部科学省の外国人児童生徒教育アドバイザーの他，文化庁委託「日本語教育人材の研修プログラム普及事業 児童生徒等に対する日本語教師【初任】研修」（公益社団法人日本語教育学会受託）の講師，全国各地の教育委員会によるCLD児教育に関する講演や研修会の講師などを多数務め，学校教育現場における人材の養成においても幅広く活躍されています。中でも，学校教育現場の先生方と協働で，児童・生徒の日本語レベルに合わせたカリキュラムの作成や教科内容と日本語指導を統合させた教育の実践・研究などに精力的に取り組まれていることは特筆すべきところです。このように，研究と教育実践とを往還させながら現場の課題に向き合い，現場の関係者と連携・協働して問題解決を目指す櫻井氏の取り組みは，学術研究に根ざした社会貢献として高く評価されるに値するものです。

櫻井氏のこれまでの貢献と，全国の学校教育現場が直面している課題に取り組む真摯な姿勢を称えるとともに，今後のさらなる活躍に期待して，櫻井氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2023年度 日本語教育学会 功労賞

受 賞 者　　遠藤 織枝（えんどう おりえ） 氏

【授賞理由】

遠藤織枝氏は，1962 年に初めて日本語教育に携わって以来，60 年以上の長い年月の間，常に日本語学研究と日本語教育実践の最前線で活躍してこられました。文教大学に在職中は，留学生への日本語教育と日本人学生の日本語教師養成に力を注ぎ，2008 年に定年退職されてからは，EPA 看護・介護受入事業にかかわる日本語教育の重要性を訴え，積極的に社会啓発に取り組んでこられました。2009 年に日本語教育学会の中に「看護と介護の日本語教育」ワーキンググループが発足した際には，その立役者として中心的な役割を果たしました。このような，日本国内における日本語教育の発展への貢献を認められ，2017 年には文化庁長官表彰を授与されました。

日本語学研究の分野において，遠藤氏は女性語研究の代表的な研究者の一人です。日本語ジェンダー研究に努める研究者の中に遠藤氏の著書や論文に触れていない者はいないでしょう。遠藤氏を中心とした研究グループの現代日本語研究会による『女性のことば・職場編』（ひつじ書房，1998 年）は，当時としては貴重な電子媒体による自然談話資料をもとに書かれた論文集で，これが多くの若手研究者に新しい気づきを与え，この分野の発展に大きく貢献したことは疑う余地もありません。

また，日本語教育学の分野においても，遠藤氏は早くから多大な業績を残してこられました。編集主幹を務めた阪田雪子監修『日本語を学ぶ人の辞典―英語・中国語訳つき 新訂』（新潮社，2011）は，1995 年に初版が刊行されて以来，日本語を学ぶ人と教える人のどちらにも広く活用されてきました。さらに，前述した看護・介護の日本語に関連した著書も数多くあり，共編著『5 か国でわかる介護用語集―英語・中国語・インドネシア語･ベトナム語･日本語』(ミネルヴァ書房, 2018)や共編著『やさしく言いかえよう介護のことば』(三省堂，2015) などは，現場で働く外国人だけでなく，彼らにかかわるすべての人に大いに役立つものとなっています。これは，日本語教育の専門家として介護福祉士の国家試験のあり方について弛まず検討を続け，政府をはじめ世の中に訴えつづけてきた遠藤氏の地道な活動の証でもあります。

このような研究・執筆活動と並行して，遠藤氏は現在も「にほんごの会企業組合」の代表理事,「看護と介護の日本語教育研究会」の幹事などを務められており，絶え間ない情熱で常に後進の鏡となっていらっしゃいます。

以上のように，優れた研究業績はもちろん，日本語教育の社会的な認知の向上に尽力してこられた遠藤氏のこれまでの功績を称え，ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2023年度『日本語教育』論文賞 受賞論文

外国人散住地域における外国人住民対応ローカル・ガバナンス構造の検討
―ライフキャリア形成を支える地域日本語教育の視点から―〔調査報告〕

掲載号：『日本語教育』185 号（2023 年 8 月発行）、pp. 109-124

執筆者：家根橋（やねはし） 伸子（のぶこ） 氏（東亜大学）・山本（やまもと） 晋也（しんや） 氏（周南公立大学）

【授賞理由】

言語教育は，時代の要請の中でその役割を担ってきたが，本論文は日本語教育を社会的文脈の中でとらえ整理しなおす意義をあらためて気づかせてくれるものである。特に，外国人散住地域における外国住民のライフキャリア形成という視点から，ガバナンス構造を体系的に記述し今後の方向性について論じているが，その論理構成は見事であり説得力がある。本論文は，各地の日本語教育を俯瞰的視野で研究する上でも，参考にされるべきものである。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

本論文は，地域日本語教育について，国家保障の側面と地域社会システムで育むライフキャリア形成という側面から，その性質や役割の違いを可視化している。緻密で明快な論考は，共生社会の発展に寄与するには何が必要かをわかりやすく訴えるものである。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

外国人集住地域や大都市とは異なる，外国人散住地域の暮らしに根差した日本語教育の実像を丁寧に描きだしている点，また，複数のステークホルダーへのインタビューや支援団体への参与観察など多層的なデータを収集，分析している点，さらに，ローカル・ガバナンスやライフキャリア形成といった視点から現状と課題を客観的に浮き彫りにしている点に新規性があり，高く評価される。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

外国人材の受け入れが急速な勢いで進められている中，本学会は，共生社会の実現や日本語教育の環境整備についての議論の輪に少なからず影響を与える立場にある。領域や立場を超えて，社会全体で議論が広がる中，多くの人々に広く訴える力を持つ本論文の受賞は，まさに時宜を得たものである。

以上

受賞論文 要旨

外国人散住地域における外国人住民対応ローカル・ガバナンス構造の検討
―ライフキャリア形成を支える地域日本語教育の視点から―

外国人住民のライフキャリア形成のための地域日本語教育を論じる上では，地域社会の中に日本語教育を定位する作業が不可欠である。本調査研究では，外国人散住地域Ｘ市におけるフィールド調査をもとに，その外国人住民対応のあり様をローカル・ガバナンスの枠組みを利用し明らかにした。さらにその枠組みの検討から，散住地域における地域日本語学習支援は，ガバナンスにおいて独自の役割を持ち，現行の国の地域日本語教育施策と必ずしも整合するものではないことを示した。外国人住民のライフキャリア形成を支える日本語教育において，地域の日本語学習支援と国の地域日本語教育制度は両輪関係にある。本稿では，地域日本語学習支援が，地域の多様な人材が連携する日本語学習支援活動を通じて外国人住民を地域社会のネットワークに取り込み，その関係性の中でライフキャリアの形成を支える日本語学習・ことばの学習へと動機づけるとともに，地域外の多様なリソースへとつなぐ役割を持つことを述べた。
【キーワード】 外国人散住地域，ローカル・ガバナンス，ライフキャリア形成，地域日本語教育日本語学習支援

A Study of Local Governance Structures for Foreign Residents in Depopulated Areas: From the Perspective of Community-based Japanese Language Education Supporting Life Career Development

YANEHASHI Nobuko and YAMAMOTO Shinya

This study aims to identify the structure of the support system for foreign residents in city X, a depopulated region where foreign residents live in dispersed areas, and to examine the role of community-based Japanese language education. We carried out fieldwork and analyzed the data using the local governance framework. The result showed that support activities for Japanese language learning in depopulated areas have been functioning autonomously within the local governance system, and are not necessarily consistent with the current national policy for community-based Japanese language education. For the Japanese language education of immigrants, Japanese language learning support by the residents and the national system of Japanese language education must go hand in hand. The role of community-based Japanese language learning support is to integrate foreign residents into the local community through its diverse support activities including language support, in which various local personnel work together. It connects foreign residents to diverse resources inside and outside the community. Through those supportive activities, foreign residents will be taken into the communities' social network, and gain motivation for Japanese language learning that will support the formation of their life careers within this relationship.
【Keywords】 depopulated areas, local governance, life career development, community-based Japanese language education, Japanese language learning support
(YANEHASHI: University of East Asia, YAMAMOTO: Shunan University)

2023年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

受 賞 者 一 覧（50 音順）

【授賞対象】

2023 年度は，2005 年以降、学会の役員・代議員・旧評議員・委員として，一定の年数を歴任し，尽力のあった以下の皆さまに，学会活動貢献賞を贈ります。

和泉元（いずみもと） 千春（ちはる） 氏

岩田（いわた） 一成（かずなり） 氏

内海（うつみ） 由美子（ゆみこ） 氏

川端（かわばた） 一博（かずひろ） 氏

小林（こばやし） ミナ 氏

齋藤（さいとう） ひろみ 氏

砂川（すなかわ） 裕一（ゆういち） 氏

俵山（たわらやま） 雄司（ゆうじ） 氏

中井（なかい） 陽子（ようこ） 氏

新山（にいやま） 忠和（ただかず） 氏

西村（にしむら） 学（まなぶ） 氏

松下（まつした） 達彦（たつひこ） 氏

三代（みよ） 純平（じゅんぺい） 氏

村澤（むらさわ） 慶昭（よしあき） 氏

以上